

『言葉と物』 第六章 交換すること

- ・ 「 」は、本文（ときに大きく改変・縮約）。
- ・ ▶は、本文の趣旨をまとめたもの。
- ・ 【 】と■は、加藤の補足。

【第六章のあらすじ】

- 【1】 富の分析 【経済学史について一般的に言われていること】
- 【2】 貨幣と価格 【ルネッサンスの思考——類似。暗く輝く金属】
- 【3】 重商主義 【古典主義時代の思考——交換。富を表象する貨幣。金銀の特権的表象能力】
- 【4】 担保と価格 【貨幣＝担保という規定（貨幣記号説／貨幣商品説の台座）。価格＝貨幣の表象能力】
- 【5】 価値の形成 【重農主義者における価値＝自然の豊穡さ】
- 【6】 有用性 【効用主義者における価値＝有用性（その基本的命題は重農主義者と同一）】
- 【7】 全体的な表 【《富の分析》と《博物学》《一般文法》。18世紀末における《エピステーマー》の変動】
- 【8】 欲望と表象 【表象空間が破れ、欲望が出現する（近代へ）。サドの文学】

【1】 富の分析 【「経済学」史について一般的に言われていること】

〈p187上〉

- ▶古典主義時代には**経済学は存在しなかった**。それは**生産**というものが実在しなかったからである。
- ▶そのかわり**《富》**という**領域**が存在し、価値、価格、商業、流通、収益、利子といった概念を包含していた。

↓この《富》について、

〈p187下〉 「【現在の】経済学から分析しても無駄である。」

↓それにもかかわらず、普通の思想史家は次のように考えている。

- ▶「科学的経済学を阻んでいたのは、

- (1) 「正当な価格とは何か」「利子は正当か」などの**道徳的な提起**の仕方と、
- (2) 「貨幣と富」「価値と価格」の混同（重商主義）であった。

↓ところが、

- (3) (2)の貨幣については、貨幣＝金属主義者と貨幣＝反金属主義者との論争を経て、18世紀には、貨幣＝「恣意的ではないが、約束ごと」という性格が明らかになった。
(貨幣＝金属主義者……ロック、カンティオンなど／反金属主義者……ジョン・ロー、モンテスキューなど)
- (4) (2)の価値については、交換価格と内在的価値が問題となり、価値の逆説（なくてすむダイヤモンドが高く、必要不可欠な水が安い）が指摘され、価値が有用性（＝効用）の理論と結びつき【「ジェヴォンズを予告するかのように」→限界効用説？】、また、「ベッヒャーの原理」（物価の高さが商業発展に対して持つ重要性）も理解されるようになった。
- (5) そして「重農主義」によって生産機構の分析が始められた。

↓このようにして、

- (6) 経済学の本質的テーマが**沈黙のうちに断片的に準備されたところへ**、生産に関する新たな解釈が行われ、
- (7) スミスが分業発達過程を、リカードが資本の演ずる役割を、J=B・セーが市場経済の幾つかの基本法則を、それぞれ明らかにした。
- (8) そして、それ以降、経済学は固有の対象と内的整合性をもって実在するようになった」と。

↓けれども、【こうした「経済史」に反して】実際には、

〈p188下〉

「17、18世紀において、貨幣、価格、価値、流通、市場といった諸概念は、**厳密で一般的な認識論的配置**を地盤として思考され、この配置が「富の分析」を支えていたのである。」

↓すなわち、

〈p189上〉

「【富の分析】は**実践や諸制度と結びついている**ために、一般文法や博物学と成立過程に違いはあるが、**同一の基本的知**【＝ある種の知＝隠された知】に基づいている。」

「ある文化のある時点においては、常にただ1つの《エピステーメー》があるに過ぎず、それがあらゆる知【明示される知、実践知など】の成立条件を規定する。語らせなければならないのは、知のこうした基本的必然性である。」
……→【参考1】(1)～(4)

■重商主義（16世紀末～18世紀。コルベール（1665年～ルイ14世下財務総監）など）

貨幣（金銀）と富を同一視し、その増大を目ざす。貿易黒字（「国内商業はゼロサムゆえ富の増大に寄与しない」）を人為的に作り出す政策をとる。輸出奨励金、関税や規制による輸入制限、冒険商人の保護。輸出奢侈品産業（高級織物、ガラス、陶器など）の偏重、農業の軽視。穀物の低価格政策による低賃金化。利益を得るのは特権商人や大製造業者。

■ロック（造幣局長官ニュートンの顧問：政府の刻印は銀の重さと純度の証明（正確に情報提供すべき）と主張）

1695年、通貨を回収し（銀の価値が高騰していたため、削り取られた銀貨しか流通していなかった）、再発行（削り取りを反逆罪としたが）→銀貨の流通がほとんどなくなる。（グレーバー『負債論』から）

■「価値の逆説」についての「限界効用説」の説明（←ジェヴォンズ（1835年～82年）など）

水は「総効用」（消費による効用の総量）は大きい、豊富に供給されているために「限界効用」（消費量を1単位増加したときの効用の増加分）が小さい【少し増えても嬉しくない】。ダイヤモンドは稀少だから交換価値が高い【同じ1万円で買ひ足すならダイヤモンドを買う】。

■カンティヨン（1697年～1734年）

アイルランド生まれ。ロンドンで商業、パリで銀行業。『商業一般の性質に関する研究』（死後1755年）。

■「1720年の災厄（p188上）」（ミシシッピ泡沫事件）とジョン・ロー

1716年、フランス国内に一般銀行設立。18年に王立銀行に改組。不換紙幣を発行【?】。ミシシッピ川沿岸の開拓を目的とした会社を設立。金鉱・銀鉱発見のニュースを流したため、株価は急激に上昇。また株券への支払いの4分の1を貨幣、残りを公債としたため、公債が大幅に値上がりし、政府も発行額を増加。19年末、暴落。

■南海泡沫事件（1720年・イギリス）とニュートン

1711年、南海会社（スペイン領南米および太平洋地域との貿易を目的）設立。国債全額引受けが公表されたため、空前の株式投機ブームが起こるが、事業計画の内実が明らかとなり暴落。破産者続出、政界スキャンダルに発展。ニュートン（1699年～造幣局長官）も大損したらしい。

■ベッヒャー（1635年～1682年）の原理：「ある人の支出は他の人の所得である」

→ケネー「穀物の自由な取引を許可し（国内流通も制限されていた）、「良価」にまで引き上げなければならない」

→【「物価の高さ」というより「良価」が農業、そして商業を発展させる（賃金も小麦価格に対応していた）】

■重農主義（ケネー『経済表（1758年「原表第1版」～1767年「範式」）』）

農業だけが生産的（剰生産物を生む）であり、商工業は不生産的（加工・交換をするだけ）とされる。自由放任を主張（重商主義の商工業偏重と保護干渉を批判）。『経済表』は、地主階級（国王、僧侶、貴族）、生産階級（農業経営者）、不生産階級（商工業者）の3つの階級間における生産物と貨幣の流通と分配の【あるべき】過程を線で示した。『経済表』は貨幣について、次のように書いている。

- ・「鑄貨は、販売と購買の媒介的担保である」
- ・「貨幣が能動的富であるのは、富（生産物or貨幣）を受け取る代わりに富（貨幣or生産物）を渡す限りにおいてである」
- ・「（個々人が貨幣を渴望するのは）それが他の富を表象するからである」
- ・「貨幣は不生産的な人々の手許にとどまるべきでない」
- ・「国内で使用される貨幣には所有者がない【とすべきである】」
- ・「農業国民の保有貨幣量は、土地の純生産物ないし年収入にほぼ同額でありさえすればいいのだ」

■アダム・スミス（『国富論』1776年）

(1) 富（労働が生み出す）＝必需品と便益品。国民の豊かさ＝富の総量／消費人口。

生産的労働……必需品と便益品の生産に直接従事（召使いや教師は不生産的）。

豊かさの増進は、分業による労働生産性の上昇による。

(2) 重商主義批判……貨幣（金銀）が増大しても、富自体の総量に変化なし（名目額が高くなるだけ）。

(3) 資本家は、地主から土地を借り、労働者を雇い、自分の資本（原材料・道具や機械）を使って生産する。

- (4) 「自然価格」……賃金、地代、利潤の自然率（その社会にとって一般的・平均的な報酬率）によって決まる。
 (例) 賃金率=1000円/時間、地代=500円/平方メートル、利潤=5%、であるとき、
 ある商品の生産に、労働=1時間、土地=10平方メートル、資本=10,000円、が必要ならば、
 その商品の自然価格は、 $1000+5,000+500=6,500$ 円。
- (5) 市場価格は（フェアで自由な競争によって）自然価格に近づく（資本投下は、市場価格<自然価格の部門から、市場価格>自然価格の部門へ移動 → その部門の商品が増え、市場価格が低下し、市場価格<自然価格になる）。このメカニズムによって、人々はリーズナブルな価格で商品を買うことができる（「見えざる手」）。
- (6) 資本家による部門移動が、生産的労働率を増やし、分業を進め、富をもたらす。
 「労働が富を生み出す（1）」とはいえ、資本家が主役。

■リカード（『経済学および課税の原理』1817年）

- (1) 商品の価値は投下労働量によって決まり、それが賃金と利潤に分配される。
 (2) 差額地代……耕作地は生産性の高い土地から低い土地へ移って行かざるを得ない。地代=穀物の価格-生産費。
 穀物の価格=限界地（最も生産性の低い土地）での生産費 → 価格=高い、地代=ゼロ。
 (3) 賃金も、生存費（自然賃金）に下落していく（←マルサス「人口法則」から）
 (4) 土地の収穫は逡減していく。
 (5) スミスにおいては資本家が主役であったが、リカードは、資本家・地主・労働者間の所得分配をテーマにした。

■セー（1767年～1832年）の法則

- (1) 総供給=総需要（全般的な過剰生産=回復不可能な恐慌は起こらない）
 (2) 貯蓄が増えると利子率が下がり、投資が増える（回復不可能な恐慌は起こらない）

【2】貨幣と価格【ルネッサンスにおける「経済的」思考——類似。暗く輝く金属】

〈p189下〉

- ▶16世紀における経済的思考は、ほとんど「物価の問題」と「貨幣の材料=金属の問題」に限られていたが、この両者は結びついていた。それは、**その金属がそれ自身として富であったからである。**
「語が、その語の語るものと同一の実在性を持ち、生物の標識が生物の身体に刻みつけられているのと同様に、富の尺度となる記号は、それ自体が貴重で、稀少・有用で所有欲をそそるものでなければならなかった。」
 ↓だから、

〈p190下〉

- ▶（16世紀の）人々は、鑄貨の名目的価値を、そこに含まれる金属の量に合致させようと努めた。
 ▶1561年、**■エリザベス1世（グreshamの助言）**が、銀の悪貨を回収し、良貨（銀含有量の多い鑄貨）を発行。
 ▶1575年、計算貨幣（リーヴル）の廃止、1577年、エキュ金貨を実質的鑄貨かつ計算単位に。
 ↓しかし、

〈p191下〉尺度としての役割を危うくする現象が明らかになる【すでに明らかだった？】。

- ▶（1）グreshamの法則……悪貨ほど流通し、良貨は退蔵されて取引に使われない。
 （2）貨幣も価格を持つ。
 ▶マレストロフは、16世紀を通じて「同じ量の麦に対して同じ重さの金銀を与えていた【金銀流通量/商品量の安定が前提】」から、名目上は騰貴していても「【本当は】何もかも騰貴していない」と書いたが、ボダンが、新世界からの金属輸入の増加により商品が騰貴したと指摘した（良貨鑄造のため、同一の商品に多くの金属が与えられるようになった【金銀の価格が安くなった】）。
 ↓つまり【両者のどちらの指摘が正しいかではなく】、

〈p193上〉貨幣という標識は両面的であり、

- ▶（1）「金属の量」である（マレストロフ）と同時に、（2）「商品」である（ボダン）ことが示されている。
 ↓このことは、
 ▶16世紀における記号（=しるし【標識】）の一般的体制と同様である。

「記号は類似関係によって構成され、この類似関係が認知されるためには、さらにまた記号が必要であった。」
 【→〈p53下～p54上〉を参照】

「貨幣という記号も、自らの交換価値を規定し標識として成り立つためには、**一定量の金属を基礎としなければならず、さらに、その金属自体が、他のすべての商品の秩序の中で、自らの価値を規定していなければならない。**」

▶ 〈p53下～p54上〉

「記号（シーニュ）は、それが指し示すものと類似関係【1】を持つ（すなわち相似したものをもち）限りにおいて、記号である（シニフィエ）。」 ← ■「シニフィエ＝記号である＝意味する」（事項索引p44）

「記号とは、《別種の》類似【2】【でもある】。最初の相似【1】に隣接しているが、それとは別のタイプの相似【2】、そして【その相似2は】、最初の相似【1】を認知させるのに役立つが、それ自体【相似2は】、第3の相似【3】によって明らかにされるような相似なのだ。」

↓【以下のような理解でよいか？】

- [記号(=相似1=)指し示されるもの] (=相似2=) [記号(=相似1=)指し示されるもの] (=相似2=)……

「相似2」は、「相似3」= {相似2、相似2、相似2……} によって明らかにされる。

「相似2」が、「相似1」を認知させるのに役立つ。

- [貨幣(=尺度=)一定量の金属] (=交換=) [貨幣(=尺度=)一定量の金属] (=交換=)……

- [言葉(=類似1=)物] (=類似2=) [言葉(=類似1=)物] (=類似2=)……

→ ルネッサンスにおける《類似》の集合 = {言葉、物、言葉、物、……}

↓そして、

〈p193上〉

「この類似性と記号との際限のない振動を停止させるために、金属と商品の間にもある種の間隔を指定する必要がある、究極においてはこの関係が、貴金属の商品としての価値の総計を決定するとともに、その結果として、すべての商品の価格を原基の標準に合致させることを可能にしていたのである。」

↓この関係は、神の摂理によって設定された関係である。

▶ 地下（金属）——地上（金属、商品、欲望、富）——天上（星）

(1) 相似を示す標識は、認識を導くものであるがゆえに、天上の完璧性に訴える。 【商品＝天上】

(2) 交換における記号は、欲望を満たすものであるがゆえに、金属の暗い呪われた輝きにもとづく。 【金属＝商品】

(3) 金属は星の輝きを地の底に再現している。金属についての知は世界についての知である。 【地下＝天上】

↓このようにして、「貴重なもの」の円環〈p196上〉が成立し、

(4) 富についての反省は宇宙に関する思弁となり、また世界に関する認識は、金属の秘密、富の獲得へと導く。

↓しかしこの知は、機を見るすべを心得た人間、すなわち商人だけに与えられるのである。

〈p194下〉

「《占卜者》が類似と記号との果てしない戯れに対して占めていた地位を、《商人》は交換と貨幣との戯れに対して占めるのだ。「この地上からでは、自分たちの周りにあるわずかな物さえほとんど見ることができないから、それぞれの場所、時における要求の多寡に応じて価格をつける。商人たちはこの要求の多寡を速やかによく察知する。」」

【3】重商主義【古典主義時代の思考——交換。富を表象する貨幣。金銀の特権的表象能力】

〈p195上～p195下〉

- ▶ ルネッサンスにおいて「美しい金属はそれ自体として富の標識」であり、「経済学者」たちは、金属の2つの機能「尺度と交換」の基礎を、その内在的《特徴》に求めた。

↓それに対し、

- ▶ 17世紀には、交換機能が基礎となる。

↓この逆転は17世紀全般の「重商主義」を通じて行われたと言えるが、「重商主義」は誤解されており、

〈p196上〉

「人々は、性急にも「重商主義」を「貨幣中心論＝富と貨幣の混同」によって特徴づける」のである。

↓しかし、「重商主義」が富と貨幣の間に設けたのは、

「貨幣を富を表象し分析するための道具とし、富を貨幣に表象される内容とする、熟慮された関係だったのである。」

↓すなわち、

「あらゆる富は《貨幣》となることができ、流通の場に置かれる。自然のあらゆる存在が《特徴づけうる》ものであって、《分類学》に納めることができたのも、あらゆる個体が《名指しうる》ものであって、それを《分節化された言語（ランゲージ）》のうちに取り入れることができたのも、あらゆる表象が《記号（シーニュ）》によって示されうるものであって、それを《同一性と相違性の体系》のなかに取り入れ《認識》することができたのも、同様のことにほかならない。」

〈p196下〉【重商主義における「富」と「金銀貨幣」】

- ▶重商主義が「富」と呼ぶものは「必要、有用、楽しみ、希少性」の性格を帯びた物である。
- ▶また金銀自体は富ではなく(有用性は少なく豊富でもある)、それが貴重なのは【富を表象する】貨幣だからである。
↓こうして、
貨幣は(その材料である金属も)、**その記号としての機能**から価値を受け取ることになる。
↓それにしても、なぜ金銀が記号となる(シニフィエ)能力をもつのか。
- ▶それは**金銀の特権的表象能力**である(硬く永続性があり、粒に分けることができ、運ぶのも穴をあけるのも容易)。

▶ 〈p198上〉人々は次のように「重商主義」を批判する。

- (1) 「**金属自体に価値がある**」とした。→しかし、これは「重商主義」が批判した当のものである。
- (2) 「一連の矛盾」がある。「貨幣=記号」としながら「貨幣を蓄積せよ」。「通貨の量的変動」の重要性を認めながら「物価への影響」を軽視。「交換が富の増加をもたらす」と考えながら「保護貿易」を主張した。
↓しかし、(2)のような批判は、

〈p198下〉

- ▶ 「貨幣は記号か商品【富】か」という「重商主義」にとっては意味をなさない問いである。→ 〈p202下〉
↓というのも、古典主義時代の思考において、
- ▶貨幣は「富の表象」だったのであり、そのような記号がなければ、富は「動きのない」ものにとどまるからである。
↓すなわち、
 - (1) 「貨幣が富の記号であり(シニフィエ)うるためには、貨幣自体が**富**でなければならない」のであり、
【貨幣は、**富の表象**であることによって、記号となり、交換可能性を持つ】
 - (2) また、「貨幣が**富となる**のは、それが記号(シーニュ)だからである。」
【貨幣は交換可能性を持ち、**現実に交換される**ことによって富になる】
↓つまり【「貨幣=富」にも「貨幣=記号」にも見える】ことから、

〈p199上〉

- ▶蓄積の原則【(1) 貨幣=富】と、流通の規則【(2) 貨幣=記号】との、**外見上の矛盾**が生じたのである。
↓しかし、重商主義は次のように考えていた。
 - 〈1〉輸入や国内製造によって富を出現させ、**交換によって富を移動させる**ために必要なものは、金属貨幣である。したがって金属を獲得しなければならない。だから政策は、「金属の国外への移動や鑄貨以外への利用の禁止」と「関税による貿易黒字化、未加工商品の輸入奨励、製品化生産物の輸出など」になる。
 - 〈2〉また、蓄積された金属は停滞させるのではなく、国内で消費するべきである。ベッヒャーの言うように「一方にとって支出であるものは、他方にとって収入である」。そもそも**金属貨幣が現実に富になるのは、その表象機能が完了するその限りにおいてだからだ。**■ケネーも同じことを主張している。
 - 〈3〉したがって、金属貨幣の蓄積が物価を上昇させる心配はない。最初は上昇させるとしても、商業や製造業に刺戟を与え、富の増加によって、貨幣/富は減少する(物価は下降する)。それどころか貴重な品物が増え、他の品物との関係においては価格が低下する。
↓こうして、

〈p200上〉

- ▶**富と貨幣の関係**は、金属の「貴重性」ではなく、**流通と交換において設定された**のである。
- ▶そして「貨幣=人体における血液」という、古い隠喩が再び見出される。■『リヴァイアサン』(1651年)
↓このような隠喩にも考古学的必然がある。なぜなら、
- ▶ 〈p200下〉富の領域が、表象の領域と同一の様態にもとづいて成立していたからである。
 - (1) 富は【**金銀の特権的表象能力のゆえに**】部分に分析され、比較可能となり、互いに他の富の記号となる。
 - (2) 世界のあらゆる富は、1つの交換体系【**人体**】に所属する限りにおいて、互いに他の富と関係づけられる。

〈p201上〉【3】の結論

「その経済上の決定要因および帰結がいかなるものであったにせよ、《エピステーメー》のレベルにおいて検討すれば、重商主義は、価格と貨幣に関する反省を表象の分析の正当な線におこうとする、ながいゆっくりとした努力と見えるだろう。それが出現させた「富」の領域は、ほぼ同じ時期に博物学のまえに開かれた領域や、一般文法のまえに展開された領域と、連結するものなのである。」

- ▶しかし、他の2つの場合には【**古典主義時代への**】変動が急激に起こったのに対し、貨幣と富の存在様態は、実践や制度と結びついているため、その歴史的粘着性の係数ははるかに高かったのである。

【4】担保と価格【貨幣＝担保という規定（貨幣記号説／貨幣商品説の台座）。価格＝貨幣の表象能力。そして時間】

〈p201下〜〉【以下、「貨幣＝担保」について】

- ▶ (1) 17世紀の早い時期に始まった「記号としての貨幣の危機」がある。■「17世紀の危機」
- (2) 17世紀の終わりには、通貨不足による、商業の沈滞、物価の低下、地価の暴落などが経験される。
- (3) 18世紀の初めには、平価切り下げ（金属含有量を減らす）や平価切り上げが行われた。
- (4) 1701年に紙幣が出現し、やがて国債に切り替えられる。
- (5) ローの実験によって商業が活気を取り戻した。
- (6) 1726年の勅令によって、ルイ金貨が製造される。
↓こうした経緯のなかでたたかわれた議論について、
- ▶ 〈p202下〉人々は普通、「貨幣記号説」と「貨幣商品説」の対立を見る。
↓しかし、その対立は表面的であり、
- ▶ この対立を必然的にさせる「唯一の配置」＝「貨幣＝担保という規定」があったのである。
 - ・ロック——『金利引き下げに関する考察』（1691年？）
 - ・ムロン——「金銀は、人々の黙契によって、あらゆるものの担保、等価物、あるいは尺度である」（1734年）
 - ・フォルボネ——「重要な点は、金銭の所有者が、望むときに、慣習によって定められた比率で交換できるという確信をもつことである」（1754年）

↓つまり、

〈p203上〉

- ▶ 貨幣は、引き替え札（純然たる擬制）に過ぎない。
- ▶ 貨幣はまた、自らと交換されたものに正確に相当する（同じ量の商品かその等価物と再び交換されうる）。
↓すなわち、
「表象作用において、記号がその表象しているものを思考の前に呼び戻す力を持たなければならないのと同様に、貨幣は、その所有者の手に、それと交換されたものを引き戻す力を持つ。貨幣とは、個体となった記憶であり、かつ、まだ実現されていない交換である（すなわち二重化される表象である）。」
↓しかし、それを保証するものは何か。

- ▶ 〈p203上〉【「貨幣＝商品」と「貨幣＝記号」の】分岐点がここに位置している。
 - 〈1〉貨幣の材料である物質の商品としての価値によって保証されている。
 - 〈2〉集団的同意あるいは君主によって結びつけられている他の何らかの商品によって保証されている。
…→ ローは、土地を抵当とする紙幣（＝証券）が流通可能だと考えたのであり、この企ては失敗したが、「貨幣＝担保」の理論自体は、毫も傷つかなかった。
↓だから、

- ▶ 1726年の勅令は、担保を、正貨の材料の金属商品としての価値に求めたのである。
【「担保」という意味で〈1〉も〈2〉も同じだが、〈2〉が「貨幣記号説」と誤解される】
↓たとえば、テュルゴは、ローを「貨幣記号説」だとして批判し、

〈p204上〉「金銭が尺度であるのは、商品としての資格においてである」（1749年）と書いているが、
↓ローも「貨幣＝担保」としていたのである（だから「信用貨幣」の先駆者ではない）。

〈p204下〉

- ▶ (1) J・ロー… 貨幣の外部にある商品（土地）によって、より良く保証されると考えた（豊富で安定している）。
- (2) 反対者… 貨幣の金属材料によって、より良く保証されると考えた（確実で、投機の影響を受けにくい）。
↓すなわち、
- ▶ 「ローとその批判者たちとの対立は、保証となるものと保証されているものの距離に過ぎない」のである。

〈p205上〉【以下、「価格」について】

- ▶ 富の価格を定める貨幣の能力は、17世紀末には、貨幣の表象機能から規定されることになる。
通貨の流通量増大＝各商品のもつ表象要素の増大。商品量の増大＝各金属の保証（表象能力）の増大。
↓したがって、
〈p206上〉「正当な価格というものはない」ただし「望ましい通貨量はある」→〈p207下〉
↓ところで、

〈p206下〉

「同一の金属塊が、いくつもの等価物（品物、労働、1 枡の麦……）を表象することができるのは、普通名詞がいくつもの物を表象する力を持ち、分類学における特徴が、いくつもの個体、種、属を表象する力を持つと同様である。」

↓そして、

「特徴の外延は、その特徴を持つ種の数（タブローの中に占める空間）によって規定され、**流通の速度**は出発点に戻るまでに通過する所有者の数によって規定される（だからこそ農業収穫物への支払いが起点として選ばれる。そこには確実な1年ごとのサイクルがある）。」

↓したがって、

〈p207上〉

「収穫量を出発点として人口を考慮し、貨幣がすべての人の手を通して、各人の生活の質を表象するための、必要かつ十分な貨幣数量を決定できる。」

↓このことから、18世紀において、

- ▶ 「農業所得から出発する流通の分析」と「人口増加の問題」と「貨幣の最適量の計算」が繋がっていたのであり、この3重の問題は、**規範的**な形で提起されることになる。

↓言い換えれば、

〈p207下〉

「（このような貨幣の）流通が実現されるとき、物の価格は「正当」とは言えぬにせよ、正確に調整されたもの、つまり、貨幣総量の諸部分が最適な分節状態で富を分析する＝**《表》の出来がよい**ということ」なのだ。

↓そして、この最適量は、

- ▶ (1) 孤立した一国を考えると、例えば次のように計算することができる。

カンティヨン…「全支払いを年1回と仮定すれば、土地の生産=Aとした必要通貨量は、地主「Aの1/3」、小作人「Aの1/6」に都会の人口用に「Aの1/6」を足して、「Aの2/3」が必要となる。しかし、地代は4半期毎だから「Aの2/3」の1/4＝「Aの1/6」でまかなえる。その上、多くの支払いは毎日か毎週だから、「Aの約1/9」あれば充分である。」

↓しかし、

- (2) 国家は互いに貿易行方（その支払い手段は、物々交換、重量にもとづいた金属、銀行手形）。

この場合、計算は、土地ではなく、自国の賃金・物価と他国のそれとの関係に依拠することになる。

カンティヨン…「A国の物価が安い → 金属流入（外国がA国の物を買う） → A国の物価上昇 → 金属流出」

↓ところが、

人間は通貨の豊富な国へ移動するから（通貨とは逆に）、貧しい国は過疎化し 農業・工業が衰え貧困化する。

↓だから、政治は、通貨と人口とのこの逆の運動を調整しなければならない。

製造業がつねに豊富な労働力を見だせるためには、住民の数が**少しずつ連続的に増加**することが必要であり、また、通貨の量もつねに**少しずつ増大**しなければならない。

ここから、外国貿易を奨励し、差額を黒字に保つための方策が生まれたのである。■「**重商主義**」の理由

↓まとめると、

〈p209下〉

「国家が繁栄するのは、正貨が多いときではなく、賃金を高く維持しながら、かつ、物価を上昇させないような増加段階にあるときに他ならない（正貨の増加分は生産される富の増加分の間で配分されるので、物価は上昇しない）。」

- ▶ 〈p210上〉スペインが没落したのは、通貨量が急激に増加し、物価上昇を結果するまでに、工業、農業、人口がそれに釣り合うだけの発展をする余裕がなかったからである。

↓以上のような分析は、

- ▶ 〈p210上〉時間指標を記号と表象の動きに付加するがゆえに重要である。

- ▶ 博物学の場合は、時間は外部から介入し、連続体を攪乱し、地理上に散乱させるにすぎなかった。

- ▶ しかし、貨幣の場合には、時間は表象を律する内的法則（貨幣の表象能力が時間によって変化させられる）であり、富の分析は、微分を見出すのである。

↓富におけるこの時間の機能が、

「貨幣が担保として規定されるとすぐ（17世紀末に）現れたのは必然的である。なぜなら、信用状の通用期間、再び物にかわる速度、一定期間のうちに通過する所持者の数が、**貨幣の表象能力を特徴づける可変要素**となったからだ。」

「しかしこうしたすべては、貨幣という記号を、富に対して《表象》とみなす思考形態の結果にほかならない。」

【5】価値の形成【交換に先立つ価値を〈重農主義者〉は自然の豊穡さがもたらすと考えた】

- ▶ 〈p211上〉「貨幣と商業の理論」は、交換における「価格」を問うものであったが、「価値の理論」は、これと交叉する問い（交換したい物があるのはなぜか、それらに価値の差があるのはなぜか、等）を問うものである。

↓この見地のためには、交換される2つの物は、すでに価値を持っていないなければならないが、

▶〈p212上〉その価値も表象であるために、次のような分析が生じたのである。

(1) 交換行為【=判断】からの分析 (=言語ランゲージュの本質は**命題**にある：動詞が保証する)

(2) 交換に先立つものとしての分析 (=言語の本質は、**原初における指示**=身振り=語根にある)

↓けれども、

▶〈p212下〉「富の領域」の場合には、(1) 命題・判断と(2) 指示との区別は実在しない。

↓なぜなら、

「欲望にとって、対象との関係【指示】と「対象が欲望をそそるという肯定【判断】は同一のもの」だからである。

↓したがって、

「文法が、まず**命題の分析**を表すもの、ついで**指示作用の分析**を表すものという、2本の理論的線分【四辺形の2辺、ABとCD】を持つものに対して、経済の領域には1本の理論的線分があるに過ぎないが、とはいえこの線分は、方向の反対である2つの読み方を同時に許す。」

↓つまり、

〈p213上〉

▶(1) 価値を交換行為=判断から出発する分析……「心理学的分析」(コンディヤックなど)→【6】へ

(2) 価値を物の形成(自然)から出発する分析……「重農主義」(ケネーなど)。

▶【以下、〈重農主義者〉における価値】

〈p213下〉「**過剰=必要**〈p213上〉」による交換以前には、自然が提供する実在(財)しかなく、その一部が配分される時、富=価値となる。そして、交換には経費(運搬費、加工費、販売費など)がかかる。

〈p214上〉では、価値が形成され続ける「余剰」はどこからくるのか。

〈p214下~p215下〉商取引からではなく、工業生産からでもなく、農業労働そのものでもなく、

〈p216上〉自然との「物理的取引」=「原初的交換」〈p217上〉による。

「農業は、生産による価値の増加が、生産者の維持費に等しくない唯一の領域である」

↓したがって、〈重農主義者〉の政策は、地代に重要性を与えることになる。

〈p216下〉(1) 耕作者の賃金を上げずに、農作物の価格を上げる。(2) すべての租税を地代から徴収。

(3) 独占価格や商業上の特権の撤廃。(4) 大量の金銭を土地に回帰させること。

↓まとめると、

〈p217上〉

「〈重農主義者〉たちは、価値のなかに指示されてはいるが**富の体系より以前から実在する、物それ自体**を手がかりに分析を始める。それは、**語根**や、音と物との直接的関係から出発する際の文法学者と同じである。」

【6】有用性【効用主義者は価値を有用性と考えたが、基本的命題は〈重農主義者〉と同一である】

〈p217下〉【効用主義者における価値】

▶効用主義者は、交換において**受け取る側**の立場を出発点として選ぶ。

それは、文法学者における**命題の理論**に照応している(「判断」がいかに関値に転じるかを問う)。

↓

▶Aが麦を、Bが葡萄酒を「有用」だと考えて作ったとして、価値は次のように生じる。

〈p218下〉(1) 双方の余分=相手の必要のとき**交換され**、無用であったものが有用になり、双方に同価値が生じる。

〈p219上〉(2) 一方の余分が他方の必要に不足するとき、交渉の結果、ある量の麦とある量の葡萄酒が交換される。

〈p219下〉(3) 「余分はない」と考えるときでも、互いの**見積り**が調整され、交換価値が決まる。

↓つまり、〈p220下〉必要(尊重価値)がなければ交換は行われないが、交換も価値を創り出す。

〈p220下〉そしてまた、交換は交換価値とは別の「**評価価値**」(総計一定)を生じさせる。

〈p221上〉【〈重農主義者〉と効用主義者の基本的命題は同一であること】

▶両者とも次のように考えている。

(1) あらゆる富は土地から生じる【効用主義者にとっては「限り」があり、それが必要を感じさせる】。

(2) 物の価値は交換と関係がある。

(3) 流通は可能な限り単純・完全でなければならない。

↓つまり

〈p221下～p222上〉

(1) 効用主義者……**自然の多産性に限り**がある (－) → 必要を満たすための運搬・加工は価値の増加 (+)

X (欠乏) + a + b + c + ……

(2) 重農主義者……**自然の際限のない多産性** (+) → 運搬・加工は財の総計を減少させる (－)。

X (豊穰) - a - b - c - ……

↓ということであり、

(+) or (－) による《分節》=《截断》と、《主辞=属辞関係定立》「物に価値を与える (その物はしかじかの価値である)」が結びついていることに変わりがない。

〈p222下〉【知の考古学について】

▶ 「重農主義者は土地所有者を代表し、効用主義者は商人や企業家を代表する」と両派を説明することができるかもしれないが、その体系が思考されるための条件は、その社会集団のうちにはない。

▶ 研究の2つのレベルが区別されなければならない。

(1) 学説論的次元……………利害関係や闘争の経緯などの調査。

(2) 知の考古学の次元……両派の知が整合的・同時に思考されえた、そもそもの条件を明らかにする。

【7】全体的な表【《富の分析》と《博物学》《一般文法》。18世紀末における《エピステーマー》の変動】

▶ 《富の分析》は、《博物学》《一般文法》と同一の布置に従っている。

↓なぜなら、

〈p223上〉効用主義者と重農主義者が「価値の理論」で説明するのは、

(1) 体系の本源的始まり=「必要(見積もり)による結合」である。【重農主義では「過剰=必要(p213上)か?】つまり、ここでの価値は、《一般文法》の「主辞=属辞関係定立」機能(動詞)に照応する。

(2) また、尊重価値が**評価価値**となり、体系の内部において、価値は他の価値によって《截断》される。

つまり、価値は、動詞以外の要素(名詞や名詞的機能をもつ語)の「分節化」を演じる。

↓すなわち、

▶ 〈p223下〉価値は、《博物学》における《構造》と同じ地位を占めるのである。

↓そして、

〈p224上〉

▶ 「貨幣と価格の理論」は、《指示》機能(語根や動作による言語ランゲージュの分析)と《転移》機能(譬喩や意味の変位)に照応する(価格の変化=修辭的転位)。」

↓また、

〈p224下〉

▶ 「貨幣と価格の理論」は、富に対して個別的標識を与えると同時に、それらが、空間内に占める場所を一時的にせよ指定する。つまり、博物学における《特徴》の理論と同一の位置を占める。

↓したがって、

▶ 〈p225上〉自然界の秩序と富の秩序は、語によって顕示される諸表象の秩序と同一の存在様態をもつ。

↓そして、博物学が出来のよいものであった場合と同様に、

▶ **貨幣は良く調整された場合に、言語(ランゲージュ)と似た機能を果たしうるのである。**

↓とはいえ、重要な相違が存在する。

〈p225下〉

▶ 【普遍的】言語(ランゲージュ)の4つの契機は互いにしっかりと結びついている(動詞の出現によってその実在が始まる瞬間から、4つの契機は互いに他を要求するから)。しかし、**諸言語(ラング)の現実の発生過程**においては、

「指示と転移の間に想像力による変位」や「分節化と主辞=属辞関係定立の間に誤謬」が増殖する。だからこそ人々は、無限に遠い地平に、普遍的言語の観念を投影するのである。→ p233図〈結合法〉と〈百科事典〉

■ 「文法は精神活動の一部であり、精神活動は普遍的だから、文法は普遍的である」(ポール・ロワイヤル文法)

↓そして、

〈p226上～p226下〉

▶ 博物学=学問も、富の流通=制度も、**自然発生的言語(ランゲージュ)**に内在する危険を避けなければならないが、

(1) 博物学は、構造(直接的可視性)と特徴(体系の一貫性 or 方法の正確性)によって理論的に閉ざされている。

だから、構造によって結合法の好例となり、特徴によって存在と類似に関する詩法が定まる。

(2) 富の領域においても、【現実の】言語(ランゲージ)においては、開いたままである線分間の空隙【AとBの間、CとDの間】が、価値と価格によって閉ざされている。それは、価値が尊重価値から評価価値へと自動的に変化する(分節化と主辞 = 属辞関係定立を調整する)、貨幣が量の増減によって価格の変動を制限(指示と転移を調整しているからである(価値はさまざまな富を互いに結合し、貨幣は現実におけるそれらの交換を可能にする))。→ p233図 〈諸存在の構造〉 〈物の価値〉 と 〈種族の特徴〉 〈商品の価格〉

↓つまり、

「【現実でもあり普遍的とされる】言語(ランゲージ)の**無秩序な秩序**のなかには、ある種の技術との関係、この技術に課せられた**際限のない任務**との関係が含意されているのに対して、自然と富の秩序は、構造と特徴、価値と貨幣の实在という単純な事実のうちに顕示されるのだ。」

↓とはいえ、富の理論は何らかの政治学に結びつく。

〈p227上〉

「言語(ランゲージ)の場合は、記号体系は不完全なままに受容されており(だから理論が規則的様相をおびる)、また博物学は記号体系を設立するが、富は人間によって生産され、増やされ、変容させられる記号である」からだ。

↓しかしながら、

▶ **基本的四辺形の他の2辺【BとCの間、DとAの間】はまだ開かれたままである。**

▶ いかにして、指示作用(1点のみをみざす、個別的なものにかかわる行為)が分節化を可能にするのだろうか?

▶ いかにして、相対する2本の線分(「判断の線分と意味の線分」「構造の線分と特徴の線分」「価値の線分と価格の線分」)は、互いに関係づけられるのだろうか?

↓この「関係づけ」のためには、

〈p227下〉

(1) 諸表象が互いに類似し、想像力の作用のもとで互いに他を想起させ(諸表象の連鎖)、

(2) 自然の諸存在は互いに隣接および類似の関係にあり(諸存在の切れ目のない連続面)、

(3) 人間の必要は互いに照応しあい、満たし合うこと(自然の強大な生産力)、

を想定しなければならない。

↓

「こうしたすべては、古典主義時代の《エピステーメー》の全体的布置の一部をなしている。」

▶ このような**連続性の原理**のうちに、17、18世紀の**形而上学**にたいする強い契機を認めることができる。

■スピノザ「観念の秩序および連結は物の秩序および連結と同一である」(『エチカ第2部・定理7』)

↓その一方で、

▶ 〈p228上〉「分節化と主辞=属辞関係定立」と「指示と転移」は、**科学的**に強い契機を規定している。

▶ **18世紀末に西欧の《エピステーメー》全体に生じた変動**について、いますでに次のように特徴づけることができる。

(1) 古典主義時代の《エピステーメー》が**形而上学的**に強い契機をもったところに、**科学的**に強い契機が成立し、逆に、古典主義時代が最も強固な**認識論的**絆で締め付けていたところに**哲学的空間**が開ける。

↓事実、

(2) 「経済学」における「生産の分析」は、**価値と価格の関係**の分析をその本質とする。

「生物学」における「有機体」や「比較解剖学」は、個体の構造と属や科の一般的特徴との関係を説明する。

「文献学」は、言語(ランゲージ)の形式的配置(命題を成立させる力)と語の意味を結びつけるため、歴史の作用を受けた形態上の恒常的要素の総体を研究する。

↓すなわち、

〈p228下〉

「文献学、生物学、経済学は、〈一般文法〉〈博物学〉〈富の分析〉と同じ場所に成立するのではなく、それらの知が空白のままに残した空間、それらの知における**相対する2本の理論的線分を隔てていた、存在論的連続体のざわめき**に満ちたあの深い畝溝の底に成立する。」

↓そして、

「古典主義時代の知の対象が解体するところに、新たな哲学的空間が開けつつある。主辞=属辞関係定立の契機と分節化の契機が分離し、形式的命題学と形式的存在論との関係の問題を生じさせる。原初における指示作用の契機と時間の流れのなかでの転移の契機とが分離し、起源における意味と歴史との関係が提起される。こうして近代における哲学的反省の2つの大きな形態が定置されるのだ。」

▶ 〈p229上〉古典主義時代の思考の本質的問題は、同時に《分類法》でもあるような《名称体系》を発見すること、あるいは、存在の連続性に対して透明であるような記号体系を決定することが問題であった。

↓しかし、

- ▶近代的思考が基本的に問題とするのは、真であるものがもつ形式および存在がもつ形式に対して、意味というものがいかなる関係にあるかである。「ひとつの——おそらくは到達不可能の——言説が君臨している。それは、存在論であると同時に意味論でもあるような言説なのだ。」

【8】欲望と表象【表象空間が破れ、欲望が出現する（近代へ）。サドの文学】

- ▶〈p230下〉古典主義時代の《エピステーメー》の終焉は、言語、生物、必要の表象からの解放と一致する。

↓そしてそのとき、

「語り続ける民衆の晦冥だが執拗な精神、生命の激しさとその努力、必要のもつ秘かな力が、表象の存在様態から逃れ出る。意志あるいは力に似た何ものかが出現する（表象は外部から支配されることになる）。」

↓この逆転が起こるのは、サドの時代である。あるいはサドの作品が、

- ▶欲望と表象との**束の間の均衡**を表している。そこに(最後の)「遊蕩」の原理がある(これ以降、性の時代が始まる)。

〈p231上～p232上〉

- ▶「遊蕩者」とは、欲望に従いながら、醒めた表象によって、そのわずかな動きも照らすことができ、またそうしなければならない人間である。表象は欲望によって生気を与えられねばならないし、欲望は言表されなければならない。
- ▶『ジュスティーン』と『ジュリエット』は、近代文学の誕生に際して、ルネッサンスと古典主義の間における『ドン・キホーテ』と同じ位置を占める。

(1) 『ドン・キホーテ第1部』……主人公は、世界と言語(ランガージュ)との関係を読み取り、類似の戯れによって、旅籠に城を、田舎娘に貴婦人を認めながら、それとは知らずに、表象の様態のうちに閉じ込められていた。

(2) 『ドン・キホーテ第2部』……主人公は、表象的仮構のなかの純然たる登場人物と化す。

(3) 『ジュスティーン』……欲望と表象は、彼女を欲望の対象として表象する〈他者〉の現前によって結びつくに過ぎず、彼女自身は、表象という外的で冷たい形でしか欲望というものを知らない。……→【参考2】(1)

(4) 『ジュリエット』……ジュリエットはあらゆる欲望の主体であり、しかも欲望を《言説》として定着させる。物語は欲望や暴力を語りながら、同時に表象の燦然たる表(タブロー)を展開する。……→【参考2】(2)

↓そしてこの物語は、古典主義時代を閉じるのである。

「この《名ざす》ことを目ざす最後の言説では、物は**必要最低限の名で呼ばれ**、修辭的空間は解体し、同時に、あらゆるものを名ざして**際限なく引き延ばされている**。」

↓サドは「古典主義時代の言説と思考の果てに到達した」のであり、

- ▶〈p232下〉サド以降、暴力、生と死、欲望、性が表象の下に巨大な影の連続面を広げはじめ、我々は今日それを、我々の言説、自由、思考のなかに取り入れようとしているのだ。

↓けれども、

「我々の思考は極めて限られており、我々の自由は極めて服従に甘んじやすく、我々の言説にはあまりにも無駄な繰り返しが多いので、この影を究め尽くすのは、海を飲み尽くそうとする類の事柄だと認めざるをえない」のである。

■▶古典主義時代の知の実定性が解体し、新たな実定性が成立するためには、1つの基本的な出来事が必要だったが、我々はその大部分を把握できずにいるのは、我々がこの出来事の広がりの中にあるからなのだ(p240下)。

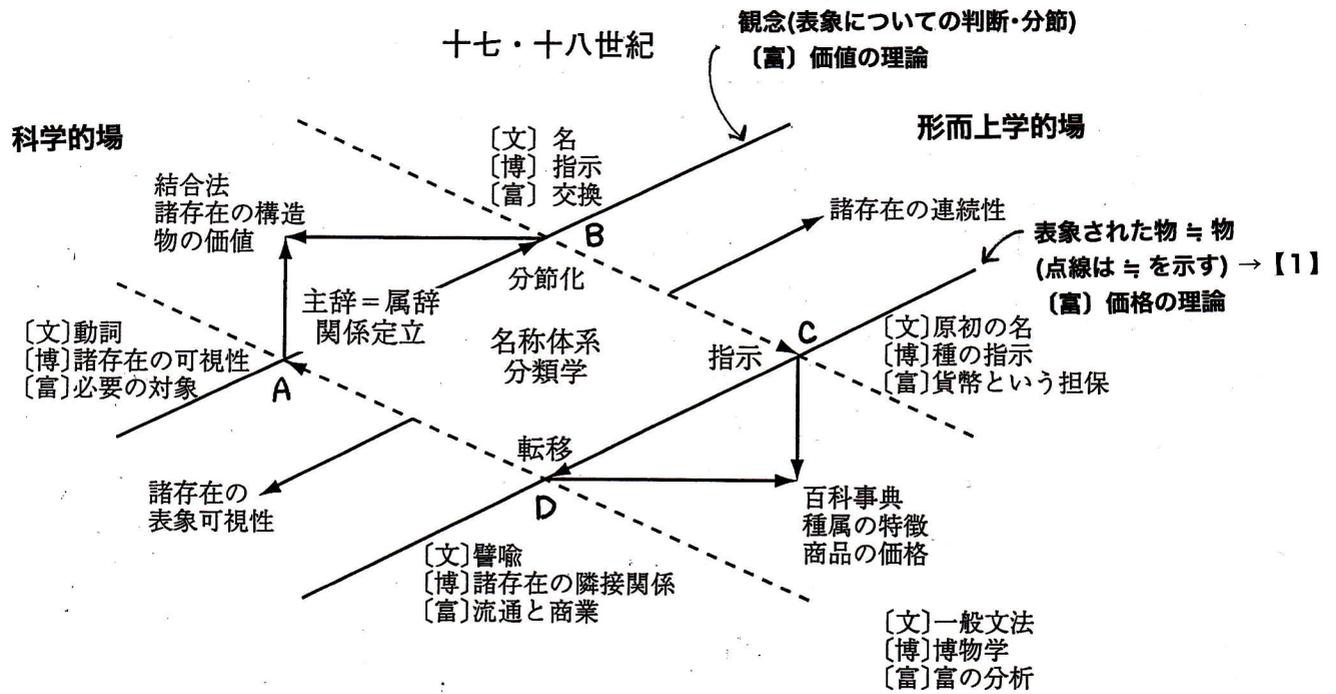
それが何であったかは、自己の歴史の根源において、自己を再把握する思考によってのみ、確定されるだろう(p237下)。……→【参考1】(5)

【参考1】『知の考古学（河出文庫）』から要旨引用

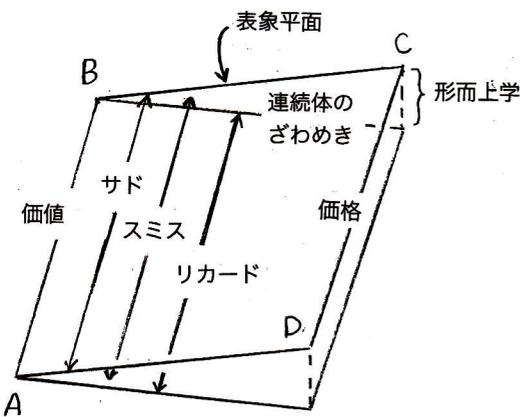
- (1) 『言葉と物』においては、方法論的な標識の不在によって、「**文化的全体性の観点からの分析**」と信じられることになった。この危険を回避できなかったことに、私は心を痛めている。〈p37〉
- (2) 次のような疑念が浮かぶかもしれない。エピステマーとは、1つの世界観、1つの時代の人間がそこから逃れることのできないある種の思考の構造のようなものではないのか、と。しかし、エピステマーとは、ある時代の諸**科学**を言説的諸規則のレベルにおいて分析するとき、それら諸科学のあいだに発見することのできる諸関係の総体なのだ。〈p360〉
- (3) {一般文法、博物学、富の分析} は記述可能な集合のうちの1つに過ぎない。…… (a)
例えば {一般文法、歴史的研究、テキスト批評} には別の間言説的ネットワーク…… (b)
が描き出され、そして (a) と (b) はいくつかの点において交叉するだろう。〈p300〉
↓ただし、
- (4) この3領域における諸規則の集合は、各領域を特徴づけるほどに種別的で、また、より広く高いレベルの言説グループが構成されるほどに多くのアナロジーを示してもいる。〈p121〉
- (5) ロゴスの普遍的現前を歴史に対して保証するのだとしたら、変化や革命をいかなるものとするのか。変化に対していかなる可能性を与えるのか。あらゆる限界、断絶、混乱、区分を越えたところに、西欧の大いなる歴史的かつ超越論的な運命を探し求めるのは、何を恐れているからなのか。〈p392〉

【参考2】

- (1) 「私は言葉を続けられなくなりました。相手は醜い情熱を満足させる手立てを、はやくも私の苦痛のなかにもう一つ余分に見つけていたのです。（略）その卑劣な男は我が身の不幸を嘆く私の甲高い口調に興奮を覚え、非情な心でそれを楽しみながら、すすんで罪深い企てを実行しようとしていたのです！」『ジュスティーン』
- (2) 「今あたしの妹が語り終えた物語をお聴きになった皆さんは、あたしがごく若いうちから、あんなに並外れた道徳を身につけていたことに驚かれたことと思いますが、その最初の手ほどきをしてくれた2人の女についてまずはお話しして、あたしの心の奥底にあらゆる悪徳の種が蒔かれたとき、つまり、この2人の妖婦によって誘惑され墮落させられたときの模様を、正しくお伝えするのがよからうと存じます。」『ジュリエット』



- [1] 「古典主義時代の形而上学は、秩序から〈秩序〉への、自然の諸存在から〈自然〉への、人間の知覚（あるいは想像力）から神の悟性と意志への、このわずかな隔たりのうちに宿っていたのである。」〈p239下〉
- [2] スミスは労働量を還元不可能な計量単位としたが（p242下）、ここに生じたのは、微少だが本質的な1つのずれ【交換や必要とは別の分析尺度が現れた】であって、思考全体を回転させずにはおこなった（p258下）。しかしスミスは「生産活動としての労働【価値】」と「商品として売買される労働【価格】」を暗黙のうちに同一視していた。それは、いまだ表象に優先権を与えていたからである（p272下）。
- [3] リカードによってこの両者は区別され、労働は「表象よりも根源的な価値の源泉」となる（p273下）。以降、生産の理論は流通の理論に先行しなければならない（p273下）。そして、土地は労働なくしては不毛なものと捉え返され、「生命をすり減らしながら」《働く人間》が登場する。



十九世紀

